

A・MUSEUM

vol.51
[2007.6.25]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



いばらぎ自然環境フォトコンテスト第16回入選「蛍舞う西山の里」撮影者 藤田孝雄

誘惑の青い光

初夏の里山を彩るホタルの光は、オスとメスとが出合うための恋のシグナルです。オスは、メスを探するために飛翔しながら発光します。一方メスは、オスを誘惑する光シグナルを葉の上で放ちます。光を介したこの熱い語らい、実はこの光、冷光れいこうといって触っても熱くありません。発光物質のルシフェリンが、化学変化することによって発光するのです。白熱球に比べエネルギーの大部分を発光に回すことが可能なため、熱くないのです。

茨城県では山麓さんろくの田んぼを中心に、まだまだ多くの場所でホタルを見ることができます。豊かな自然のシンボルとしてのホタルは、県内各地で保全の取り組みも行われています。ただし、ホタルのシグナルには方言があります。他の地域からの安易な導入にはご注意ください！

(資料課 久松正樹)



ヘイケボタル

第40回
企画展

キア・オラ！ニュージーランド

～キーウィと人がくらす島～

The Treasure Islands of the Kiwi and Kiwis

ニュージーランドというと、広大な牧場とたくさんのヒツジを思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。しかし、ニュージーランドには、もう一つの顔があります。それは、この島の自然がおよそ800年前までヒトの影響を受けていなかったこと、そして、今、国をあげてその保全に取り組んでいるということです。

ニュージーランドは、最も近いオーストラリア大陸から2,000km（日本の場合はたった200km）も離れており、まさに南太平洋の孤島でした。この特殊な環境は、3mにもなる巨大な鳥モアヤ、樹の高さ51m、幹



タネ・マフタ（神の木）とよばれる巨木カウリ



ブラウンキーウィ(左) とフクロウオウム（現地名カカポ）
© Museum of New Zealand Te Papa Tongarewa

の周囲が14mにもなる巨木カウリなど、固有の動植物を数多く育んできました。また、鳥類の天敵となる哺乳類のいない環境は、キーウィやカカポなど、多くの“飛ばなくなった”固有の鳥を生み出しました。

しかし、この島にヒトが移住し、一緒に移りすんだネズミやイヌなどととも鳥たちの生存を脅かし、モアをはじめたくさんの鳥たちが絶滅しました。19世紀には牧畜がはじまり、原生林もその多くを失いました。

この反省にたつてニュージーランドでは、最近、国土の1/3を国立公園や自然保護区に指定するとともに、外来種問題への徹底した対策や、固有種の保護管理など、積極的に自然の保全活動に取り組んでいます。

おりしも、日本でも外来生物法が制定されるなど、外来種対策が本格的にはじまっています。そこで、今回の企画展では、これまで当館と交流のあるニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワの協力により展示する貴重な標本資料を中心に、ニュージーランドの個性豊かな自然の魅力や、人間と自然の共生に向けた取り組みを紹介します。（資料課 栗栖宣博）



キーウィレンジャーによるキーウィの保護活動

会 期 2007年7月14日(土)～9月30日(日)

※7月14日(土)は午後1時から公開。

開館時間 午前9時30分～午後5時まで(入館は午後4時30分まで)

休 館 日 毎週月曜日

※7月16日(月)、9月17日(月)、9月24日(月)は開館し、翌日が休館となります。8月13日(月)は開館し、振替休館はありません。

●特別イベントデー「ニュージーランドデー」

日時：8月26日(日) 場所：博物館内

特別イベント① ミニセミナー&クイズ

「行ってみよう！ニュージーランド」

特別イベント② マオリのダンスショー

特別イベント③ 工作教室「毛糸でキーウィをつくろう」

特別イベント④ ニュージーランドミニ物産展

※詳しくは博物館ホームページ等をご覧ください。

●自然講座「ニュージーランドの自然とその保護活動」

講師：セドン・ベニントン氏

(ニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワ館長)

ベテ・グラハム氏

(ニュージーランド環境保全局 キーウィレンジャー)

日時：7月14日(土) 13:30～15:30

場所：映像ホール 定員：300名(中学生以上：先着順)

●自然講座「ニュージーランドの夜空で第二の地球を探せ！」

講師：大西浩次氏(国立長野工業高等専門学校准教授)

日時：9月9日(日) 13:30～15:30

場所：博物館内 定員：50名(中学生以上：先着順)

●自然講座「ニュージーランドの森に巨大なコケがすむ」

講師：樋口正信氏(国立科学博物館陸上植物研究グループ長)

日時：9月16日(日) 13:30～15:30

場所：博物館内 定員：40名(小学校4年生以上：先着順)

※お申込みは、事前に電話又は博物館ホームページにてお願いします。

※1件あたりのお申込みの人数は、6名までとさせていただきます。

里山の価値を伝えたい！

里山環境学習サポート事業

当館では、平成16年度に策定された「進化基本計画」におけるコミュニケーション機能の充実を図る事業の一つとして、平成17年度より「里山環境学習サポート事業」を展開しています。本事業は、博物館と里山活動に取り組む市民団体や学校が主体となり、身近な里山の自然に関心をもち、環境保全に努める市民を増やすことをねらいとしています。具体的な目標としては、里山の自然や環境保全に対する意識啓発、里山活動にかかわるリーダーの育成、里山活動を行う団体や市民のネットワークの拡大などを掲げています。そして、これまでに、里山環境学習プログラムの開発や普及、畑づくりやシイタケの原木栽培などの里山関連イベント、里山活動パネル展示会および記念講演会などを実施してきました。今後は、里山シンポジウムや指導者を対象とした里山セミナー、新しい環境学習プログラムの開発などを計画し、市民の研修の機会を提供したいと考えています。



博物館の野外にも里山環境が見られます

里山環境は、人と自然の深いかわりのなかで育まれてきた自然であり、そこには身近で豊かな自然が広がっています。まさに人と自然の共生によって築かれた景観といえます。

近年、里山の価値は生産の場だけでなく、美しい景

観、文化の伝承の場、環境学習の場、多様な生物のすみかとして見直され、放置され荒れた里山を再生しようとする動きが高まっています。また、多くの市民団体や学校が行政や地域と連携を図り、さまざまな里山活動に取り組んでいます。そういった活動を多くの市民に知っていただき、次の世代を担っていく子どもたちに里山の価値を伝えていくことが私たちの大きな役割であると考えています。（教育課 亀山浩二）

県内の里山で活動する団体を紹介します！

◆七郷里山会（ななごうさとやまかい）

発 足：平成12年4月

会 員 数：15名（平成19年4月現在）

代 表 者：高橋武男（坂東市大崎）

所 在 地：坂東市大崎（七郷小学校隣接の里山）

面 積：約1ha（民有地を市が借り上げ）

植 生：雑木林とモウソウチク林

主な活動：私たちは、坂東市七郷地区で、環境保全活動を続けるボランティアグループです。活動の舞台である里山、そこに隣接する小学校、数百メートル先の自然博物館は三位一体であり、お互いの持ち味・利便性を活かして、環境学習サポートの環を広げています。また竹ぼうきづくりや竹炭づくりで自然との共生を図っています。



竹林の整備に参加した七郷里山会メンバー

テ・パパのある街

5月7日から1週間ほどニュージーランドを訪れました。首都ウェリントンにあるニュージーランド国立博物館テ・パパ・トンガレワは、青く澄んだ内湾沿岸から丘陵地へと街並みが続く市街地の中央付近、海辺のすぐそばにあります。隣はヨットハーバーでリゾート地のような風景です。秋の季節を迎え、風が強く天候は変わりやすい。このため雨でも傘をさす人がほとんど見られず、私たちも郷に入れば郷に従えの例では

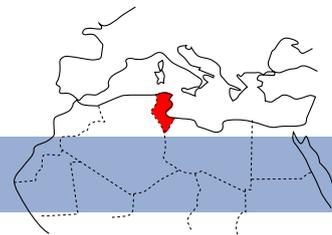
ないが面倒なので雨の中を歩き、肺炎になるところでした。人口は20万人程度なのですが平地が少なく丘陵の頂まで住宅や学校が点在しています。高層ビルはなく、英国風？の個性的な住宅が多く、街は清潔で路上生活者もおらずタバコや空き缶の投げ捨て、落書きもありません。治安は良好で、夜はマオリのお酒で乾杯し、マオリ料理を堪能し

コラム by director SUGAYA

ました。ほんの短い滞在でしたが、私が感じたテ・パパ博物館のある街はこんな街でした。



イラスト：福本陽子（ミュージアムコンパニオン）



コルクガシのふるさとを訪ねて

平成19年3月、私は筑波大学の海外実習に参加し、北アフリカのチュニジアを訪れました。チュニジアは、地中海に面した小さな国で、アフリカの国々のなかでも特に古い歴史をもち、カルタゴなどローマ帝国時代からの遺跡をたくさん残しています。

この実習は、地中海に面したタバルカからサハラ砂漠の入り口にあたるガフサまで南下し、乾燥の程度に対応した植生の変化や農業を中心とした土地利用のようすを見るといってもいいです。

地中海沿岸には、硬葉樹林とよばれる森林が広がっています。硬葉樹とは、硬くて小さな葉をもつ常緑樹のことで、冬雨型で夏の乾燥が著しい地中海性気候に適応した葉の形といわれます。同じ常緑樹でも、日本で見られるスダジイやシラカシなどは照葉樹とよばれ、夏雨型の湿潤な気候のところに見られます。代表的な硬葉樹はコルクガシやオリーブです。

タバルカを出発して山道にはいると、さっそくコルクガシ林が現れました。コルクガシはドングリのなるブナ科の樹木で、厚さ2cmの樹皮をはがしコルクをとります。裸になった幹は、15年ぐらいで樹皮がもとに戻り、再びはがされるということになります。コルクガシ林の林内は明るく、そこにはハーブで有名なロー



コルクガシ林 赤い幹は樹皮がはがされたコルクガシ、白い花はローズマリー

ズマリーやラベンダーが見られました。

オリーブ畑は、湿潤なところから乾燥地までいたるところで見られました。3月のチュニジアは、気温と雨が植物にとって最もいい季節であり、オリーブの木の下はまるでお花畑のようでした。



オリーブ畑とそこで見られた野生のヒナゲシ

砂漠に近づくとも森林はなくなり、マキーやガリグとよばれる低木林、そしてステップ草原へと変化していきます。途中のガリグで野生のチューリップを見ることができました。

現地での実習は4泊5日と短いものでしたが、貴重な経験をすることができました。(企画課 小幡和男)



ガリグとそこで見られた野生のチューリップ

アリジゴクの正体は？！

第39回企画展「ありんこアントの大冒険-土の中の生きものを探せ!-」では、アリジゴクの体験コーナーが子どもたちに大人気でした。ところで、アリジゴクとはどんな生きものでしょう。

アリジゴクは、乾いた土や砂にすりばち型の穴をつくり、足をすべらせて落ちたアリやダンゴムシなどをえさとしています。ムシャムシャと食べるのではなく、虫のからだに大きなあごを刺し込み、消化液を送

てからだの中を溶かし吸い取ります。そして残った殻は、なんと頭の上に乗せて勢いよく穴の外へ放り投げてしまうのです。

さて、アリジゴクは2回脱皮をすると、さなぎになるためにまゆをつくりまゆから出て…ウスバカゲロウに大変身!!

さあ、第3展示室でアリジゴクとウスバカゲロウの姿を探してみましよう!

(ミュージアムコンパニオン 松本光代)

小さな発見-ミュージアムコンパニオン-



企画展示室アリジゴクの体験コーナー

第1期総合調査が完了しました

総合調査は、茨城県の自然誌に関する資料の蓄積^{ちくせき}を図り、茨城県の自然の全体像を明らかにすることを目的としています。博物館開館の1994年度にスタートした第1期総合調査が、2005年度に県内を一巡し、完了しました。

〔調査地域〕

県内を4ブロックに分け、各地域ごとに3年間をかけて計画的に調査を行っています。1994年度から1996年度の期間で第1次総合調査（筑波山・霞ヶ浦を中心とする県南部地域）を、1997年度から1999年度の期間で第2次総合調査（鶏足山塊・酒沼・県央海岸を中心とする県央地域）を行いました。2000年度から2002年度の期間で第3次総合調査（阿武隈山地・県北部海岸を中心とする県北東部地域）、2003年度から2005年度の期間で第4次総合調査（鷲子山塊・久慈川を中心とする県北西部地域）を行いました。

〔筑波山で新種発見〕

土壌動物についても、1994年から総合調査が行われましたが、その中でトビムシ2種が新種として発見されました。このムラサキトビムシ科ムラサキトビムシ属の2新種は、茨城大学名誉教授の田村浩志氏によりそれぞれ、*Hypogastrura tsukubaensis*（ツクバムラサキトビムシ）と、*Hypogastrura sakayorii*（サカヨリム

ラサキトビムシ）と命名され、1997年8月30日、専門誌Edaphologiaに発表されました。「ツクバ」は模式産地である筑波山から、「サカヨリ」は本種を採集した茨城土壌動物調査会の坂寄 廣氏の名前からの命名です。この標本は今年10月から行われる第1期総合調査報告展で公開の予定です。

トビムシは、体長1～2mm程度の小さな虫で、^{はね}翅はありませんが脚は3対で、昆虫のなかまです。トビムシという名の通りピョンピョンとよく跳ねます。森林土壌の生息密度は1㎡あたり数万個体にもなり、日本では約400種、世界では数千種が報告されています。土壌動物は、土の中の有機物の分解過程で重要なはたらきをしていますが、その中でもトビムシは数が多く、また多様な環境に見られ、土壌動物の代表格です。この筑波山でも自然環境がよく保全されているため、まだまだ新種の生物が見つかる可能性があるのではないかと考えています。

めまぐるしく移り変わる地球環境の中で、茨城の自然がどのように変化していくかを正しく認識するためには、定期的な調査を継続させる必要があります。そして得られた情報を後世に伝えていくことが、自然博物館の使命であると考えています。

（資料課 湯本勝洋）



ツクバムラサキトビムシ（撮影：田村浩志）
体長1～1.3mm。筑波山山頂付近標高860mのアカガシ、ブナ、イヌガヤの林で採集されました。



サカヨリムラサキトビムシ（撮影：田村浩志）
体長1.2～1.6mm。筑波山標高760mのブナ・ミズナラ林の湿った落ち葉の層で採集されました。

どうなる！？国産ウナギ

古くから食べられ、私たちに身近なウナギ、年間10万トン以上を食べる日本は、世界一のウナギ消費国となっています。しかし、そのおよそ8割が輸入に頼っており、国産のウナギが減ってきているのはご存知ですか。

一般にいうウナギの養殖は、海で生まれて川へやってきたシラスウナギという名の幼魚を捕獲し、大きく育ててから出荷するというやり方です。そのため、養殖ウナギの生産量

は、シラスウナギの漁獲量で大きく左右されます。近年、シラスウナギの漁獲量は減少気味で、養殖にも影響がでています。不漁の原因は、乱獲や河川の汚染、気候変動などが考えられます。このまま不漁が続けば国産のウナギが食べられなくなる可能性もあります。しかし、天然ウナギの生態が、最近の調査・研究で少しずつ解明されてきました。詳細がわかれば、卵から育てる完全養殖につながり、みなさんの食卓に上がる

おさかな通信

のもそう遠くないのかもしれませんがね。
（水系担当 石坂泰敏）



ウナギ

風洞実験装置を展示しました

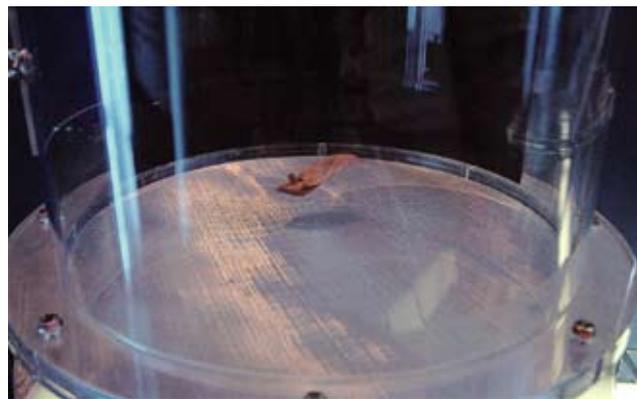
昨年度の10月から1月にかけて、第38回企画展「とんだね・ついタネ・およいダネ 種子の不思議を科学する」が開催されました。この企画展では、展示室に入っただけのところに、回転しながら飛んでいるタネを見ることができる風洞実験装置を展示しました。その展示が、装いも新たに常設展として復活しました。その場所は、第4展示室に入って左側のガラスケースの中です。風洞実験装置では、大きなファンで下から上方向に風を発生させているのですが、その風は場所によって風速が違ったり、渦を巻いていたりして、そのままではタネは安定して飛びません。風を安定させるためにどのような工夫がされているのか、今回の装置ではその部分を見ることができますので、じっくりとご覧ください。

風洞実験装置で飛んでいるタネは、翼をつけ、安定して回転しながら飛ぶことができるタネ（アオギリ、ツクバネ、メグスリノキ等）です。種子植物はタネをつくり、タネを散布させることによってその生育範囲を広げてきました。タネを遠くに散布する方法の一つとして、風による方法（風散布）があります。風散布のなかでも、装置内で飛んでいるタネは、綿毛をつけ

たタンポポのようなタネと比べて、重くできています。そのため、翼で風を受け、回転することで少しでも滞空時間を長くし、風力で遠くへ運ばれるように工夫しているのです。

自然界では、風洞実験装置で見られるように、タネが回転しながら空中で留まっているようなことはありません。しかし、この装置を使うことで、自然界では見ることができない、タネが回転しているようすをじっくりと見ることができるのです。

（資料課 国府田誠一）



風洞実験装置内で飛んでいるアオギリのタネ

海藻がきれいです！

海藻というと、食卓に並ぶ黒色の「のり」や「こんぶ」、「ひじき」などを思い浮かべる人も多いことでしょう。しかし、実際に海で見られる海藻は、それはカラフルな彩りを見せています。

茨城県はご存じのとおり海に面しています。暖かくなったこの季節に県内の海岸を歩いてみると、たくさんの海藻が見られるのをみなさんは知っていますか。砂浜に打ち上げられている海藻もありますが、春の干潮時の磯では赤や緑、褐色の美しい海藻が鮮やかな姿で群落をつくっています。

海藻は植物のなかまですが、すべての海藻が緑色をしているわけではありません。むしろ、緑色の海藻は

少数で、紅色や褐色にみえる海藻の方が数多くあります。海藻の色は、それぞれの海藻がもつ色素の組み合わせによりますが、海藻を上手に標本にすることで、美しい「海藻おしぼ」をつくることができます。

6月のイベント「サンデーサイエンス」では、県内で採集した海藻を用いて、たくさんの来館者の方々に海藻おしぼづくりを楽しんでいただきました。

（教育課 亀山浩二）



茨城県内の磯に見られる褐藻「ヒジキ」



6月のサンデーサイエンス「海藻のおしぼづくり」のようす

海藻を台紙にはりつけた作品



トピックス

○4月29日はありんこデー？

第39回企画展「ありんこアントの大冒険」の記念イベントとして、アリの生態にせまるイベントを4月29日（日）に開催しました。午前中は、博物館野外で見られるアリの観察です。アリの専門家である濱口京子氏（森林総合研究所）のレクチャーで、アリについて楽しく学びました。

午後は場所を映像ホールに移し、まずはじめに「アリとハチはどちらが偉いか？」のトークバトルです。アリを応援する濱口氏に、ハチの専門家である当館久松正樹氏が挑みました。ハナバチが植物の受粉に役立つことなどで攻勢をかけたのですが、アリは飛べなくても生活できるテクニックや集団の力で応戦。約200名の参加者の判定（下の写真）を鳥類担当の私がカウント。結果は、僅差でアリの勝利でした。

最後は、「アリはなぜ一列で歩くのか」の著書で有名な山岡亮平氏（京都工芸繊維大学教授）の講演です。えさを見つけたアリは、地面に吸着物質とともにフェロモンを残していきます。そのフェロモンの匂いをたくさんのアリがたどっていきます。これがアリの行列の正体なんだそうです。山岡氏は、フェロモンを用いてアリにサッカーをさせることに成功しました。アリのサッカーの映像は、参加者のみなさんにたいへん好評でした。（教育課 伊藤 誠）



トークバトルの判定をする参加者たち

○森のおじさん復活！？

5月4日（金）のサイエンスデーにスポットガイド「森のおじさん」が久々に復活しました。

おじさんは、北茨城市定波のブナ林をモデルにした第3展示室の森のジオラマの中から、お客様の呼びかけにこたえてひょっこりと姿を現わしました。そして、ブナ林に2匹いるニホンリスやまさに獲物を捕らえようとしているキツネ、鮮やかな赤色のかさを持つタマガクなど林内に生育するさまざまな植物や動物を紹介しました。

ブナは日本の山地を代表する樹木であり、その林内には多くの種類の植物が生育し、美しい新緑や紅葉が

見られます。ジオラマには、スポットガイドで紹介した生きもののほかにもたくさんの種類の動植物が隠れているのでみなさんもじっくり観察してみてください。

この日は、おじさんの復活にさそわれたのか10年ぶりに1万人を超える来館者を迎えることができました。

（企画課 永濱隆之）



ブナ林の「森のおじさん」

○とびだせ！子ども自然教室

5月12日（土）に「タケノコの秘密をさぐろう」というテーマで、とびだせ！子ども自然教室を実施しました。当館野外にあるモウソウチクの林を利用し、17人の小・中学生のみなさんがタケノコについて学習しました。タケノコの皮をむいて節を数えることで、1日に最大60cmも伸びるといふタケノコの驚くべき成長のしくみを学んだり、地下茎のようすを観察したりしました。子どもたちは、歓声を上げ、汗をかきながらタケノコを掘っていました。

とびだせ！子ども自然教室は、小・中学生を対象とした体験型のイベントで、年間12回を予定しています。博物館の野外施設で、遊びをとおしてさまざまな自然に触れ、そのしくみや不思議さを楽しみながら学ぶものです。本年度から当館ボランティアが指導員として活動しており、毎月第2土曜日の10時～12時の2時間で、定員30名で実施しています。6月以降の内容につきましては、イベントガイドまたはホームページをご覧ください。（教育課 湯原 徹）



タケノコの成長のしくみについて話すボランティアの田邊五三さん

ひたすら地面を見つめる60人

大人&子どもフィールドガイド



大人コース：地層の前に土地の成り立ちを学ぶ参加者



子どもコース：大物の発見に集まる子どもたち

夢中になって時間を忘れる、心と気がつくと思ったより時間が過ぎ去っている・・・大人&子どもフィールドガイド「貝化石をさがそう」ではそんな時間をすごすことができました。このイベントは5月27日(日)、阿見町島津(霞ヶ浦の畔)で行われました。大人&子どもフィールドガイドは、大人と子どもが別々のコースに分かれて、それぞれが満足のいく活動をしようと設けられたものです。私が担当した大人コースでは、最初に地層と周辺の地形が観察できる場所へ移動し、霞ヶ浦周辺の土地の成り立ちについて知ってもらいました。

約1時間半後、化石を採取する場所へ移動してきました。しかし、ここでびっくり! 予定より30分もすぎているにもかかわらず、そこには夢中になって化石を掘り続けている子どもたちの姿が・・・。なごりおしそうな顔の子どもたちに場所をあけてもらい、今度は大人たちが夢中に。大人コースはお昼をはさんで約1

時間の採集、その後化石同定のポイントと化石から考察できる当時の環境について説明してまとめました。子どもコースでは、採集した化石の特徴をとらえて名前を調べ、博物館特製の貝化石シールをうれしそうに台紙に貼り付けていました。

最後に、安心して活動できる化石採集場所や駐車場を提供して下さったみなさんに感謝申し上げますとともに、定員60名に対して200名近い応募があったため、抽選の結果残念ながら参加できなかったみなさんにお詫び申し上げます。みなさんが夢中になれるイベントをまた企画します。(教育課 滝本秀夫)

編集後記

この春の人事異動により博物館に来て早や3ヶ月。緊張により減る体重を心配していましたが、博物館の空気がおいしのか、居心地がいいのか4月から増え続ける体重! 今回、担当になったア・ミュージアムともども、今後は緊張感をもち皆様に親しまれる博物館になるよう仕事を進めたいと思います。(I.K)

【交通案内】



- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- つくばエクスプレス守谷駅下車
～関東鉄道バス「岩井行き」又は「猿島行き」乗車
～「自然博物館入口」下車、徒歩5分
- JR柏駅で東武野田線乗り換え、愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分



【開館時間】

午前9時30分から
午後5時まで
(入館は4時30分まで)
※ペット及び遊具等のお持ち込みはご遠慮ください。

【入館料】

区分	本館・野外施設		野外施設のみ	年間パスポート
	企画展開催時	通常時		
大人	720円 (580円)	520円 (420円)	200円(100円)	1,500円
高校・大学生	440円 (300円)	320円 (200円)	100円(50円)	1,000円
小・中学生	140円 (70円)	100円 (50円)	50円(30円)	300円

(注)：()内は団体料金(20名以上)
未就学児・昭和13年4月1日以前に生まれた方・障害者手帳をお持ちの方は入館無料です。

次の日の入館料は無料です。
●5月4日(みどりの日) ●6月5日(環境の日)
●11月13日(茨城県民の日) ●春分の日
●高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日
(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)

【休館日】

●毎週月曜日
※8月13日(月)は開館し、振替休館日はありません。
※7月16日(月)、9月17日(月)、9月24日(月)は開館し、翌日が休館となります。

自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)

A-MUSEUM (AMUSEMENT+MUSEUM)

企画・編集：ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2007年6月25日
〒306-0622 茨城県東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL <http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>
E-mail webmaster@nat.pref.ibaraki.jp
メールマガジンも配信中。登録はホームページから

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。